H28 年度医療技術等国際展開推進事業専門家派遣報告書

消化器内科　病院講師　長谷川　直之

派遣期間：　平成 28 年 10 月 9 日　～　平成 28 年 10 月 15 日

平成 28 年 10 月 9 日より 10 月 15 日まで 1 週間の日程でベトナムのホーチミン市にあるチョーライ病院の内視鏡部門を訪問してまいりました。昨年、筑波大学より奈良坂医師、圷医師が消化管内視鏡検査･治療のため訪問されており、私の目的は胆膵内視鏡検査（ERCP、EUS）でした。チョーライ病院では ERCP は 8-9 症例/day、EUS2-3 例/day されており、年間で ERCP1,000 例以上、EUS400 例以上の High volume center であり、ERCP 関連手技について、スタッフの先生方の技術は非常に優れていました。胆管挿管困難例はあまり粘らずにプレカットに移行しており、High volume center らしいスムーズな処置を目の当たりにし、私自身も非常に勉強になりました。検査前に CT を確認し、検査・治療の戦略をベトナム人医師とともに議論しました。癌による閉塞性黄疸、もしくは総胆管結石の症例が大部分であり、どの胆管を狙ってドレナージするか、どのように結石除去を試みるかといったことを意見しあいました。中には膵胆管合流異常が疑われる症例や乳頭括約筋機能異常が疑われる症例など診断に苦慮し、議論が白熱する場面もありました。

私自身も ERCP・EUS を数例実際に施行しました。EUS はチョーライ病院では主に内視鏡部長の Dr. Dung が施行し、議論やコンサルテーションする相手がいないとのことでした。Dr. Dung とともに EUS 検査をしながら注目すべき所見を述べつつ、どのように観察するとよいか議論しました。ERCP デバイスはほぼすべて Reuse であり、使えるデバイスも限られており、実際に手技を行った際には日本とかなり勝手が違い、苦労しました。ERCP はチーム医療であり、ベトナム人の助手と歩調を合わせつつ施行しました。閉塞性黄疸の症例に対して、無事胆管ステントを挿入し終えた際には”Good job”と互いを称えあいました。

最終日には筑波大学で行っている「術後腸管における経口直接胆道鏡」について講演を行いました。たくさんの質問をいただきました。チョーライ病院の先生方は新しい医療技術の導入に非常に熱心であり、探究心も旺盛で、私もその姿勢に感銘を受けました。

今回の訪問では、内視鏡部長 Dr. Dung、副部長 Dr. Tung はじめ多くのチョーライ病院の方々に暖かく迎えていただきました。夜はスタッフの先生方に連日食事に誘っていただき、医療だけでなく、ベトナム社会全般についていろいろとお話を聞くことができました。今後も人的交流を通して双方が発展していければと思います。

チョーライ病院内視鏡部スタッフの方々との送別会にて

最終日、帰国前に Dr. Dung のプライベートクリニックにて
左から内視鏡副部長 Dr. Tung、長谷川、内視鏡部長 Dr. Dung